

ひと烈風録

第44回

生存率20%からの帰還 走ることが生きる証し

がんを克服しNPOを立ち上げた。肺の機能は3割失われたが、マラソンを続いている。患者を励ましながら、走ることをやめない人生。

ジャーナリスト 塚崎朝子

写真 尾形文繁

がんサバイバー NPO法人「ファイブイヤーズ」代表

大久保淳一

おおくぼ
じゅんいち

長

身の締まつた体躯、さつそ
うとして精悍な面持ち。市
民ランナーとしていかにも歴戦
のつわものといった雰囲気を漂わ
せている。まもなく54歳を迎える
が、年に3回はフルマラソン（42
・195キロ）に出場。今も自己
記録更新に挑み続ける。

いない。腹部からは50個近いリン
パ節が摘出されている。11年前に
骨折した右足首も、リハビリテー
ションが不十分だったために完全
ではない。そして、右側の睾丸も
失われている。

（ステージ3の重症）を患い、そ
のがんは全身に転移していた。の
みならず、その治療の副作用で間
質性肺炎を発症。この病気になる
と、スポンジのように柔軟だった
肺組織が線維化して発泡スチロー
ルのようになり、その部分は酸素

文字どおり死線をさまよった。生
き永らえた命は、がん経験者、そ
して今なおがんを抱える人たちを
支援する社会活動のため自ら設立
したNPO法人「5years（ファ
イブイヤーズ）」にわたっている。
「5年生存率」という言葉は大嫌
い。ファイブイヤーズには、5年
後には皆元気に活躍しているとい

足りていた42歳のとき、精巣がん
仕事に復帰するまでの1年半、

しかし肺の3分の1は機能して

A medium shot of a man jogging towards the camera. He is wearing a bright blue long-sleeved shirt with a small Nike swoosh logo on the chest. He has dark hair and is looking slightly to his left. His right arm is bent at the elbow with his hand near his shoulder, while his left arm is at his side. He is wearing a black digital wristwatch on his left wrist. The background is blurred green and yellow foliage, suggesting an outdoor park or forest setting.

がん発病後のマラソン
のベストタイムは3時
間53分。がん発病前の
3時間25分を超えたく
て、日々走り込む。皇
居周辺は昔からの練習
場所だ

う願いを込めた。がん患者に対する世の中の意識を変えたい」

15年には会員制のSNS（交流サイト）を立ち上げた。がんになつた人の情報はネット上にあふれているが、どちらかといえばつらい闘病記が多い。そうではなく、元気になつた人の情報や社会復帰をするための道しるべが欲しいと、

自分自身が渴望していた。ファイブイヤーズには、がんを経験した人が情報発信するだけでなく、患者や家族の相談にも乗る仕組みを取り入れた。プロフィール、罹患し

た部位、治療、リハビリ、そして復帰への道のりがつづられている。

かつて大久保の友人の女性が米国で乳がん治療を受けた際、現地の主治医が「あなたと同じタイプの乳がん患者だよ。連絡しても問題ないから」と、連絡先を記したリストを渡してくれたという。患者同士のつながりの重要性を示すエピソードだ。日本は個人情報保護の壁が厚く、同じことはできないが、それがヒントになつた。登録会員数が多いほど、サイトを訪れた人が自分と似通つた人を見つけやすくなる。ファイブイヤーズの会員数は4400人を超えた。

大久保は自分を鼓舞するだけでなく、「復活」という希望を与えるためマラソンを走り続ける。

米留学で学んだ 「自分で答えを 見つけ出す」

浮き沈みの激しい人生だ。

生まれ育つたのは長野県茅野市。スケートの盛んな土地で、父親は国体で連覇を果たしたスピードスケートの名選手だった。「田んぼリンク」でスケートに親しんだ子ども時代、周りから父の武勇伝を吹き込まれた。比較されることを嫌い、陸上競技に転向。県立諏訪清陵高校時代、400メートル走で全国大会を目指すまでになつた。

しかし高校最後の大会目前に負傷し、ドクターストップがかかった。多感な10代での挫折で、「努力は報われない」と勉強にも身が入らなくなつた。2浪の末、名古屋大学工学部応用化学科に入学。修士課程まで終えて、三菱石油（現JXTGエネルギー）に就職した。

フ拉斯コを振るより背広を着こなす人生にあこがれ、営業職を志望。最初は見よう見まねだったが、しだいに誠実さが認められ、社外から一目置かれるようになった。でも、つねに上を見ていた。

入社5年目に会社派遣で1年間、米国テキサス州立大学に留学した。出世コースだ。ビジネススクール

には意欲旺盛な若者が集う。だが自分は学位を取る必要のない身分で、逆に焦りが募つた。帰国後、本格的な留学のための準備を始めた。妻の英子は2年後で入社して隣の席に座つていた後輩だった。

新婚早々に夫は受験勉強漬けの日々。2度目の挑戦で合格し、英子はその合格通知を社宅で受け取つた。自費留学イコール退職を意味するが、次の目標に向けて歩み出す夫は頼もしく見えた。

大久保が入学したシカゴ大学ビジネススクールは、全米トップレベルの伝統校。現地で長女が生まれ、貯金が底を突きかけ、夏休みにはインターンシップで働いた。

インター先であるゴールドマン・サックスのニューヨーク本社には、金融界で一旗揚げたい連中が各地から集つていた。当時、大久保は金融にそれほど関心があつたわけではない。座学の途中、つぶから一刻も早くはい上がり、居



自分のことを「普通の人間」だと語る。「普通の人でも目標を持って挑戦できることを示したい」

いうとうとしてしまつた。すると講師が「今日のダウ平均株価はなぜ下がつた」と質問を浴びせた。適当に切り抜けようとすると、相手の怒りは増幅された。「正直に『わかりません。でも答えを探してきます』と言つて出ていけばいいのよ」と、ぴしやりと言い渡された。戒めの言葉は、その後ずっと大久保の心に刻まれた。答えは自分で見つけ出すものだと。

さんざんな出だしだつたが、結局、ゴールドマンの日本法人から誘いを受け、それに乗つた。35歳の新入社員だが、実力だけが物をいう世界。株式などはベテランの担当者がいて、すぐには太刀打ちできそつもない。ならばと金融ビッグバンで取引が緩和されたデリバティブ商品の担当を願い出た。息子も生まれ、家族4人の生活のために、ピラミッドの底辺から一刻も早くはい上がり、居

場所を確保したかった。

営業成績を上げようと新規の取引先の部長に「何でもやります」と持ちかけたところ、あろうことか「一緒にホノルルマラソンを走れるか」と言われ、真に受けた。ゴールドマンに入った翌年の00年12月、有給休暇を取つて自費でホノルルに同行し、人生初のフルマラソンを走り切った。自分を向上させるため、のめり込むものが欲しかったのか、はまつた。

30代後半、営業成績は伸び、マラソン大会も出るたびに自己ベストを更新した。公私とも成長が実感でき、仲間も増えた。03年、40歳を控えて、「サロマ湖100キロ」を始めた。初挑戦ながら、12時間台で完走した。その後3年連続して完走。明け

て07年2月の3連休は、家族で長野県・軽井沢に旅行した。まだ明け切らぬ早朝のトレーニング中、凍つた路面に足を取られて崖を転げ落ちた。右足首はだらりと折れ曲がり、身動きできない。気温マイナス5度の真冬の別荘地に1時間横たわったまま。凍死するかもしれないと思い始めたとき、タクシーが通りがかり、命拾いした。地元の病院の休日診療では治療が手に負えない、英子は東京へと車を駆つた。幸い、自宅から車で10分ほどの東京慈恵会医科大学附属病院に、空きベッドがあった。

5時間にわたる手術だったが、順調に回復した。

1ヶ月して退院を翌日に控え、シャワーを浴びていた大久保は異常に気づく。右側の睾丸がビードルマラソンで完走していた。のように硬くなっていた。

泌尿器科の主治医から、ランヌ・アームストロングという、米国自転車ロードレース選手が、同じ精巣がんから競技に復帰したことを知らされた。プロのスポーツ

2浪し名古屋大に合格。工学部応用化学科で学ぶ。同大大学院修士課程を修了して三菱石油に入社。入社5年目で1年間米国留学。97年米シカゴ大学ビジネススクールに私費留学

これまでの歩み

1964年 長野県に生まれる

85年 工学部で学ぶ

2浪し名古屋大に合格。工学部応用化学科で学ぶ。同大大学院修士課程を修了して三菱石油に入社。入社5年目で1年間米国留学。97年米シカゴ大学ビジネススクールに私費留学

2000年 マラソンに出会う

99年ゴールドマン・サックス証券に入社。00年人生初のフルマラソンを完走。03年ヴァイス・プレジデントに昇格。仕事、家庭(2人の子どもに恵まれる)、趣味(マラソン)のすべてが順調

07年 精巣がんが見つかる

手術で右睾丸を摘出するも、がんはステージ3で全身に転移していることが判明。5年生存率49%。手術後に抗がん剤治療が続く。さらに間質性肺炎にかかり、肺機能の3分の1を失う

10年 回復後マラソンを再開

1年半の闘病後、10年ハーフマラソン完走(3時間1分)、12年フルマラソン完走(4時間49分)、13年サロマ湖100kmウルトラマラソン完走(12時間39分)

14年 がん患者支援に

15年勤めたゴールドマン・サックス証券を退社。NPO法人「5years」の活動を本格化。がん患者の交流サイト「5years」(<https://5years.org/>)、がん患者の生活情報メディアサイト「ミリオンズライフ」(<https://www.millions.life/>)を立ち上げ。著書『いのちのスタートライン』を刊行

手術後に 全身転移発覚。 肺炎との闘い

知られた整形外科の主治医は青ざめ、大慌てで泌尿器科医に連絡。その日のうちに、さまざまなお検査が行われ、病名は精巣がんだと告げられた。現実感はほとんどなかった。大久保の大学時代、母親が乳がんを患っていたが、それもだいぶ昔の記憶だ。日頃から人間横たわったまま。凍死するかもしれないと思い始めたとき、タクシーが通りがかり、命拾いした。

地元の病院の休日診療では治療が手に負えない、英子は東京へと車を駆つた。幸い、自宅から車で10分ほどの東京慈恵会医科大学附属病院に、空きベッドがあつた。

しかし、病室に顔を見せる英子は、「泣き虫だね、薬に感謝しなさいよ」とあえて突き放し、いつも笑顔だった。大久保が孤独に耐え切れず夕暮れ時に電話すると、「子どもの世話と夕飯の支度で忙しいのよ」と一蹴された。

上京した両親は驚愕し、大久保も毎日のように病室で号泣した。

しかし、病室に顔を見せる英子は、「泣き虫だね、薬に感謝しなさいよ」とあえて突き放し、いつも笑顔だった。大久保が孤独に耐え切れず夕暮れ時に電話すると、「子どもの世話と夕飯の支度で忙しいのよ」と一蹴された。

強気を装つた英子は毎晩、自宅で手を合わせていた。「家族が普

通に接してくれるのは本当にありがたく、随分と気が楽になった」と、大久保は振り返る。

しかし腫瘍の影は消えず、この年8月には15時間にも及ぶ大手術で腹部のリンパ節を47個取り出した。5日後、すべてがん細胞の死骸であることが判明し、前途に細い光明が見えてきた。医師は日常生活に戻れればいいと考えていたようだが、大久保は「マラソンに復帰してみせる」と誓っていた。

その直後、またも悪夢が襲う。10月、抗がん剤に伴う薬剤性の間質性肺炎が急速に悪化した。間質性肺炎まで起こせば、5年生存率は2割以下といわれる。医師は「酸素ボンベが手放せない生活になるかもしれない」と告げた。がんの発症や転移の知らせ以上に衝撃だった。当たり前の生活もマラソンも失われるのだ。英子は、「(X線写真で)真っ白く見える肺がパパの模様だと思えばいいし、また走れるかもしれないよ」と、どこまでも明るかった。

集中的な治療の末、間質性肺炎を克服できたが、肺機能の3分の1は失われ、二度と戻ることはないと知った。退院の日、ボロボロの体だったが、とにかく復帰へのスタート地点に立った。

入院期間は10ヶ月、職場に復帰

するまでに1年半かかったが、日本企業に比べて、外資系、特に大久保のいたゴーリードマンには、がんであることを公にしやすい雰囲気があり、いわゆるメンターリー制度もあった。大久保はがんを抱えながら、入退院の合間に会社して仕事の指示を出し、時には病室で、部下や取引先と打ち合わせをすることもあった。

「トップを含めて、上司は『自分たちにできることは?』と声をかけてくれ、がんを経験した社員は相談相手になってくれた」

部長級から幹部級になるという昇進の時期こそ逸したもの、相変わらず、会社に必要とされた。しかし家庭と仕事を取り戻すだけでなく、マラソンを再び完走したかった。医師は「昔と違う体なのだから、マラソンは無理」と明言したが、走れなければ元の自分が何を失うのか、理解していなかった。しかし家庭と仕事を取り戻すだけでも、マラソンを再び完走したかった。

医師は「昔と違う体なのだから、マラソンは無理」と明言したが、走れなければ元の自分が何を失うのか、理解していない。まだやめない……。80キロドルを超えた頃から完走できそぞだと興

場したもの、半分の11キロドルで体が音を上げた。3時間1分台というすることはできなかつた。大会3週か完走だけは果たした。

定期的な通院では、腫瘍マークの検査値の上下に一喜一憂していたが、走り込みは強化した。

12年4月、かすみがうらマラソン(茨城県)のスタート直後、ランニング仲間の安藤一貴は、大久保の姿を見つけて仰天した。たびたび病室を訪れて激励していたが、肺を損傷したと聞き、まさかマラソンに復帰するとは予想していなかった。大久保は力を振り絞り、安藤は、最後は自分のレースを捨てて伴走した。フルマラソンを4時間49分で完走できた。

完走直後、「1年後のサロマ100キロマラソンに復帰する」と分とはいえないと考えていた。

走ることにこだわる。

100キロを完走



宣言した。それから何回かフルマラソンを完走したが、4時間を切ることはできなかつた。大会3週間前の血液検査では、異常を知らせる数値がハネ上がつていて、だが練習の疲労のせいだつたらしく、直前にデータが改善し、何とか医師の許しを得た。しかし、英子は激高した。懇願してもあきらめないことを知ると、「完走しようと強い口調で言い放つた。

けんか別れのように夫を送り出された英子は気が気でなかつた。通過地点のラップタイムはインターネットでわかる仕組みになつてゐる。英子は自宅でパソコンの画面で追い続けていた。「まだやめない。まだやめない……。80キロドルを超えた頃から完走できそぞだと興

奮し、夫にエールを送っていた」。

大久保は12時間台でゴーリン。涙は出なかつたが大きな安堵感に包まれた。「（退院からサロマ完走まで）6年もかかつたが、ようやく人生の振り出しに戻れた」。

帰路、自分のブログを見ると、なんと英子が応援者への感謝をつづっているではないか。家族の絆は深まつた。

この復活劇を偶然知ったのが、同じゴーリドマンに勤めていた浮津康宏だ。部署は違うが、病気になる前の大久保が会社のジムでスイッチに自分を追い込む姿が記憶にあつた。次の年は自分もサロマに挑戦しようと思い、大久保に助言をもらいに行って意氣投合した。実際には浮津の走力は大久保より上で、いつしか「コーチ」と呼ばれ、大久保の走りに助言を与える立場になつた。

浮津は大久保を「目的に向かって勢い込んで進んでいく姿には心を打たれるが、がむしゃらすぎて、メリハリをつけないと能力を発揮できない」と冷静に見ていた。そまたも3年続けて完走するどころか、がん発病前の記録を更新した。

50歳のとき、大久保はゴーリドマンを辞めた。

「このまま仕事人として中途半

端では終われないと考えたことが、後半の人生のモチベーションとなつた。生かされた命で社会に恩返したい」

ただ、単なるボランティアは嫌だつた。自分にしかできない役割

ががん患者の支援組織ファイブイヤーズの立ち上げであり、その社会事業化だつた。

患者支援組織を立ち上げます

会員数を1万人、3万人と伸ばしていくことを、16年にはNPO

の存在を認知してもらうため、新たに「ミリオンズライフ」という

サイトを立ち上げた。日本で新たにがんと診断される人は年間10

0万人を超えており、それが名の由来となつた。がん患者の生活情

報として、がん経験者の体験記や

インタビュー、治療の費用や保険・給付金の金額などおカネの情報

を提供している。インタビューも執筆も、大久保自ら手掛ける。

これを提案したのは、ファイブイヤーズからタッグを組むIT会社社長の山本晃だ。難病患者向け

シユで前向き。がん患者の本当に欲しいものがわかつていることに共感した」と語る。

ファイブイヤーズは寄付金だけで運営するが、ミリオンズライフは広告も集める。大久保の目標は、「社会貢献のビジネス化」だ。まだ順風満帆とはいえないが、周囲から次々に支援の声が上がつた。

ゴーリドマン時代に大久保の取引先だった橋元祐三もその一人で、ファイブイヤーズの理事にも名を連ねる。大久保のことを「昔から誠実さは変わらないが、病気後は突き抜けたように積極的になつた。多くの人の思いを背負つているからだらう」と評する。

大久保は思いを全身で受け止め走り続ける。今年6月には、記念すべき10回目のサロマ湖マラソンを終えて走り続ける。今年6月には、記念すべき10回目のサロマ湖マラソンを終えた。

塚崎朝子(つかさき・あさこ)● 読売新聞記者
を経て独立。医学、医療、科学分野などを
中心に執筆多数。著作に世界を救った日本の
「IPS細胞はいつ患者に届くのか」など。

|| 敬称略 ||

年30回ほど講演がある。
この日は生命保険会社の
営業職員を前に話した。
聴衆と軽妙なやり取り

